

急行には座れなかった。

通学の時間、ぼんやりして時間を無駄に棄てるのは、おしいが、また、別に英語の単語を覚える気もなく、結局、窓の外の景色が動くのを鑑賞しながら、ぼんやりしていた。

本当は、ぼんやりなんかしていなかった。

窓の外の景色を、知らず知らず、僕は、いつも細かく、観察している。

どこに、なにが、次に来るかも無意識にわかるようになっていた。

目を閉じて、パッと目を開けると、その情景が目の前にあるのを見て僕は、楽しんでる。

目を閉じてても、その窓の外の景色が頭に浮かんでいる。

そうしているうちに、三条京阪に着いて、バス停に急いだ。

あの子に乗るバス停からはバスが出るところで、誰も立っていない、あの子が見当たらない。僕のバスがすぐ来て座れたが、僕の気持ちは重かった。

生きてて感謝感謝だ